京都滞在中の印象

R. ミュレール*

日本学術振興会研究員として，京大宇宙物理学教室に10カ月間滞在したが，日本とフランスの，仕事の運びかたを比較して，いろいろの面で，ひどく差違があることを知る良い機会であった．

人間関係

日本では，大変うまくいっているように思われる．ある問題について，ある同意点にいたるまで友好的に議論される．フランスではたとえ多数の人の同意がなくても，一人が決定しうるが，このことがさまざまな衝突の一因になる．日本では疑問点がまず議論され，それにともなって成案がまとめられる．他方フランスでは，まず案件が示され，それについての問題点が議論される（議論の雰囲気は，かならずしも友好的ではない）．

宇宙物理教室の人々は，仕事の済んだのちもみんな親しいグループを保っているが，フランスの天文学者はもっと個人主義者である．我々はグループを作らないし，学者同士が，いつも良好な関係にあるわけではなく，競争意識は大変つよい．

また，私がびっくりしたことは，日本の学者が多様な交友関係（同窓生，研究仲間，等，等）を大切にしていることで，この関係は生涯を通じて有用であるようだ．

会　議

フランスに比べて，実務的会議が多い．来日した当初，あまりにも多いと感じたが，そのうち，会議の多いことが，日本的な問題解決法の一部になっていて，また同時にその効率の良さをある程度示しているのに，気がついた．

地位の差

フランス人と比べて，日本人（学者を含めて）は，年長の上位の人に対して，高い尊敬の念をもっている．学生は教授先生に頼りすぎているが，その代わり先生方はよく面倒（例えば就職の世話）をみている．

酒の席

京都の教室や両天文台の連中は，みんなでお酒の席をかこむ事が多い．フランスでは，同僚と一緒というのは異例の事で，個人的な友達との，それもレストランではなく，むしろ家庭でのパーティをするのが普通である．

もし我々フランス人が，仕事仲間とパーティをしても酒宴と思われないように注意しなければならない．酒宴をひらくことは，品のよくない事であり，我々の評判をおとす．とはいうものの，滞在中，私は日本流のお酒の席をたのしんだ．

観　測

飛騨天文台では，よく組織され，保守と計画が非常によく，微細な点にも深く注意されていることを，感じた．最初は，いくらか観測時間の損失のように思ったが，これが観測の効率を上げているのであると判った．フランスでの場合と比べてみると，厳密すぎる枠組の中で働くのを好まないために，我々の組織だては，やや緩やかである．これには，それぞれ一長一短がある．

☆　☆　☆

ミュレール氏は，1986年2月から12月まで，京都に滞在し，飛騨の DST での，太陽黒点の吸収線の非対称性の観測，および花山の KIPS による，それらの整約に，その大部分の時間を使われた．夫妻は，日本にしか無いものにたいそう興味を持ち，一人息子のアルノー君と共に，京都のいろいろの行事や祭を楽しみ，能，顔見世，相撲の観賞はもとより，飛騨白川郷に合掌造りをたずね，富士山登頂をはたし（記念の金剛杖は大事にフランスに持ち帰った），はては京都五山の送り火の夜，法被をきて妙法の点火に加わるなど，天文学以外の面でも日仏交流と理解に努められた．そのミュレール氏がわれわれをどの様に見ていたかを，かいていただいた．原文は英語，訳の責は斎藤にある．（斎藤澄三郎）

---

* Pic du Midi Observatory Richard Muller: Impressions from a stay in the Department of Astronomy and the Kwasan & Hida Observatories, University of Kyoto.